



学びを糧に、新たな道を

◆ 長野吉田高校の卒業式

ご卒業おめでとうございます。本校の3月は、卒業式をはじめとして毎年慌ただしく過ぎていきます。これは、いわゆる進学校と呼ばれる学校では全国どこでも同じ情景です。受験シーズンは終盤ですが、未だ道半ばの人がほとんどです。最後の最後まで粘り抜き、自分自身の最高学力で有終の美を飾ることを期待します。また、希望通りの進路実現に至らなかったとしても、そこから次にどのような目標を定め、どのように取り組むかによって新たな未来が生まれてきます。これから迎える分かれ道では、熟考を重ねて判断を下し、決断後は実行に向けて情熱を注ぎ、勇往邁進するのみです。新たな道を切り拓きましょう！

それでも今日は、晴れの卒業式です。高等学校の卒業は人生の大きな区切りのひとつです。今年は式場に保護者は各家庭2名まで、在校生では2年生の出席が叶いました。皆さんの門出を教職員、関係者一同も心から祝福しています。

◆ 高校3年間の学びを誇りにし、それぞれのネクストステージへ

皆さんは入学直後の一斉休校に始まり、来たる5月8日には感染症法上5類に引き下げられる新型コロナウイルスの感染期間とともに3年間で過ごしました。人生の節目をこの時期に迎え、学校生活や就職活動などで不利益を被った若者を、SNS等では「コロナ世代」という言葉で象徴しています。常に何かしらの物理的・精神的な束縛や制約につきまとい、健全な高校生活が送れないことへの度重なる周囲からの同情や哀れみにも嫌気が差し、無気力を覚えた人も少なくないでしょう。

しかし、そのような中でも高校生作家である鈴木りかさんは、読売新聞のインタビュー（2021年2月6日）で自身の高校2年時を次のように振り返っています。—『私たちの世代は「今の子はかわいそう。コロナで青春がなくなっちゃって」と度々言われます。実際そのとおりなのですが、哀れまれてばかりいると「そんなことないよっ！」と反論したくなる。私の17歳は、コロナ一色でした。コロナの時に自分はいくつだったか、どこで何をしていたか、というのは、これから後に、折に触れ、幾度も振り返ることになると思います。そういう意味では、戦争に近い。でも、戦時中でも、その時を精いっぱい生きた青春はきっとあったと思うし、コロナ禍でもコロナ禍の青春はあると思うのです。暗黒の時代だったとしても、17歳は17歳、青春そのものはなくなるらない、と思いたい。』—

この3年間、コロナ禍にあっても本分である学業、クラス・生徒会・諸行事などの特別活動、さらに制限の多かった課外活動などに、“晴耕雨読”の校是の下で直向きに打ち込んだみなさんの姿は、コロナ以前の吉田校生と何ら変わることなく今後新たに本校の伝統へと加わります。その時々以最善の方法で対処してきた経験により、学習で得た多くの知識や思考力が知性や生きる力に変わり、計画性や柔軟性、さらに対応力や実践力に磨きがかかりました。これら全てが皆さんの中に蓄積され、大きな財産や教養となっています。誰もが自身の成長を誇り、今後の糧として自信を持ってそれぞれの新たなステージへと旅立ちましょう。

◆ 世界の進路を見据え、知性・教養で勝負を

この一年は成年年齢の18歳引き下げから始まり、皆さんが主権者として歩みはじめた年でもありました。選挙制度は平等の象徴であり、民主主義の根幹です。責任ある主権者として、自分事として真剣に考え、理想を見失わずに次へ生かすことを今後も心に留めてください。その際に自己や人格を形成し、創造していく礎となるものは「教養」です。

歴史学者の阿部勤也氏（1935～2006）は著書『「教養」とは何か』の中で、以下のように自分だけの価値観や判断軸のみに基づく単眼的な思考ではなく、固定観念や既成概念に縛られない自分を俯瞰する力、すなわち複眼的な思考や視座の重要性を伝えています。「自分は社会の中でどのような位置にいるのかということ、そういう自分は社会のために何ができるのかということ—この2つを知っている人、あるいは知ろうと努力している人が教養のある人だ。」これはまた、現在の学習指導要領で掲げられている「総合的な探究の時間」や「キャリア学習」の目標とも重なります。

人との接触を物理的にも社会的にも遮断された社会で、自分の顔を晒すことなく不満や愚痴をSNS等に投稿する、いわゆる「たたく」行為、また「正しさは人それぞれ」「みんなちがってみんないい」というフレーズは、一見多様性を尊重する美言のようですが、見方によっては他者との関わりを切り捨ててしまう、社会にとっては非生産的な美辞麗句にも捉えられます。徳島大学教授の山口裕之氏（1970～）は著書『「みんな違ってみんないい」のか?』の中で—『社会には、両立しない意見の中からどうにかして一つに決めなければならないことがある。「サッカーと野球ではどちらが好きか」の問いに対しては人それぞれの好みでよいが、「経済発展のために原子力発電は必要か」「事故が発生した際の被害が大きすぎるので廃止すべきだ」の意見は両立しない。どちらの意見にももっともな点があるかもしれないが、日本全体の方針を決めるときには、どちらか一つを選ばなければならない。多くの人は「人それぞれ」の相対主義か、「真実の一つ」の普遍主義か、という二者択一に陥りがちだが、相対主義も普遍主義も相手のことをよく理解しようとしめない点では似たようなものである。我々は相対主義と普遍主義の間の道を、どちらかに落ちこまないように気をつけながら進まなくてはならない。』—さらに『人間は国や地域は違えども、同じような身体と感覚器官や脳を備えて生まれてくる。生物学的な面だけでなく、文化的な面においても多様ではあれ基本的な枠組みの点では普遍性があり、言語や文化の多様性は人間にとって理解可能な範囲にとどまる。こうして見ると「みんなちがってみんないい」というほどには、人は違ってないのだ』と述べています。

これまで皆さんが学んだことが、入試や試験のためだけの勉強で終わるのではなく、自分自身や自分を取り巻く社会をよりよくするために必要な真の教養へと昇華することを切に望みます。ロシア軍によるウクライナへの大規模侵攻から一年が経過してしまいました。物理的な力（武器）ではなく知性（教養）を働かせ、当事者意識を常に持ちながら長野県や日本、そして世界のよりよい進路作りに寄与することも願います。氾濫する情報を峻別し、考え抜き、バランス感覚を伴った最適な判断ができるように、今後も学びを継続してください。私の高校時代の進路室だよりのタイトルは「Cogito ergo sum」（我考える、故に我あり）でした。卒業して約四半世紀になる今では、その意味が少しだけ分かる気がします。

皆さんの活躍を教職員一同心から祈っています。進路室だよりもこれで卒業号となります。これまでお読みいただきありがとうございました。